

I 研究主題

望ましい人間関係を育み、自己指導能力を高める開発的な生徒指導
～特別活動における開発的な教育相談と話し合い活動の工夫を通して～

II 主題設定の理由

情報化、都市化、少子高齢化、核家族化などの社会状況の変化を背景に、生徒の生活体験不足や人間関係の希薄化、集団のために働く意欲や規範意識の低下などが顕著となっている。また、学校においては、非行やいじめ、不登校など生徒指導上の問題が多様化しており、その対応への難しさを感じながら日々の指導にあたっている。

これらの要因として、望ましい集団活動を通じた社会性の育成が不十分であり、生徒が望ましい人間関係を築けないということがある。このため、他者理解が不足し、自己中心的になったり、自分の思いをうまく表現できず、まわりに合わせようとしてストレスをためたり、まわりへの配慮に欠けた言動に発展したりすることもある。また、自己指導能力が身に付いていないため、自らよりよい判断ができず、周りに流されて行動してしまうということも要因の一つである。本校においても、人間関係に悩みをもち、日常の学級生活や学校行事に積極的になれない生徒や、他人に流されて行動した結果、人間関係のトラブルを招いている生徒がいる。問題行動については、その背景が複雑化しており、解決に至るまでに多くの時間と労力が費やされる。そのため、問題が発生してから対策を講じるのではなく、普段から望ましい人間関係を築いた上で、自ら考え、よりよい判断をし、行動できる自己指導能力を育成する手立てを、学校全体で行っていく必要がある。

そこで、本研究では、特別活動において、生徒の心の成長を促すことを目的とした、開発的な教育相談の手法を活用し、望ましい人間関係を育成する。教育相談は個人の悩みの解消ばかりでなく、学校生活全体に関わって心の成長を支えていくものとして、共感的な人間関係や自己存在感・社会性の育成を図る上でも効果が期待できる。特に、学級活動の時間において、構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングなど、集団を対象とした教育相談の手法を用いることで、生徒相互の心のふれあいを深めたい。さらに、そこで築かれた望ましい人間関係を基盤とし、生徒指導の三機能を生かした話し合い活動の工夫を行うことで、生徒が自ら考え、よりよい判断をし、行動できる力を育成したいと考える。

この取組を生徒の発達段階に応じて、年間を通して計画的に行うことができれば、生徒の望ましい人間関係を育み、自己指導能力を高めることができるのではないかと考え、本主題を設定した。

III 研究目標

望ましい人間関係を基盤とした自己指導能力をもつ生徒の育成を目指し、特別活動における開発的な教育相談や話し合い活動の工夫の在り方を究明する。

IV 研究仮説

特別活動において、開発的な教育相談を行うとともに、生徒指導の三機能を生かした話し合い活動の工夫を行えば、望ましい人間関係を育み、自己指導能力を高めることができるであろう。

V 研究内容

1 理論研究

- (1) 開発的な教育相談
- (2) 望ましい人間関係
- (3) 自己指導能力
- (4) 特別活動と生徒指導との関連
- (5) 生徒指導の三機能を生かした話し合い活動

2 実態調査及び分析

- (1) 自己肯定感に関するアンケート調査
- (2) Q-U検査

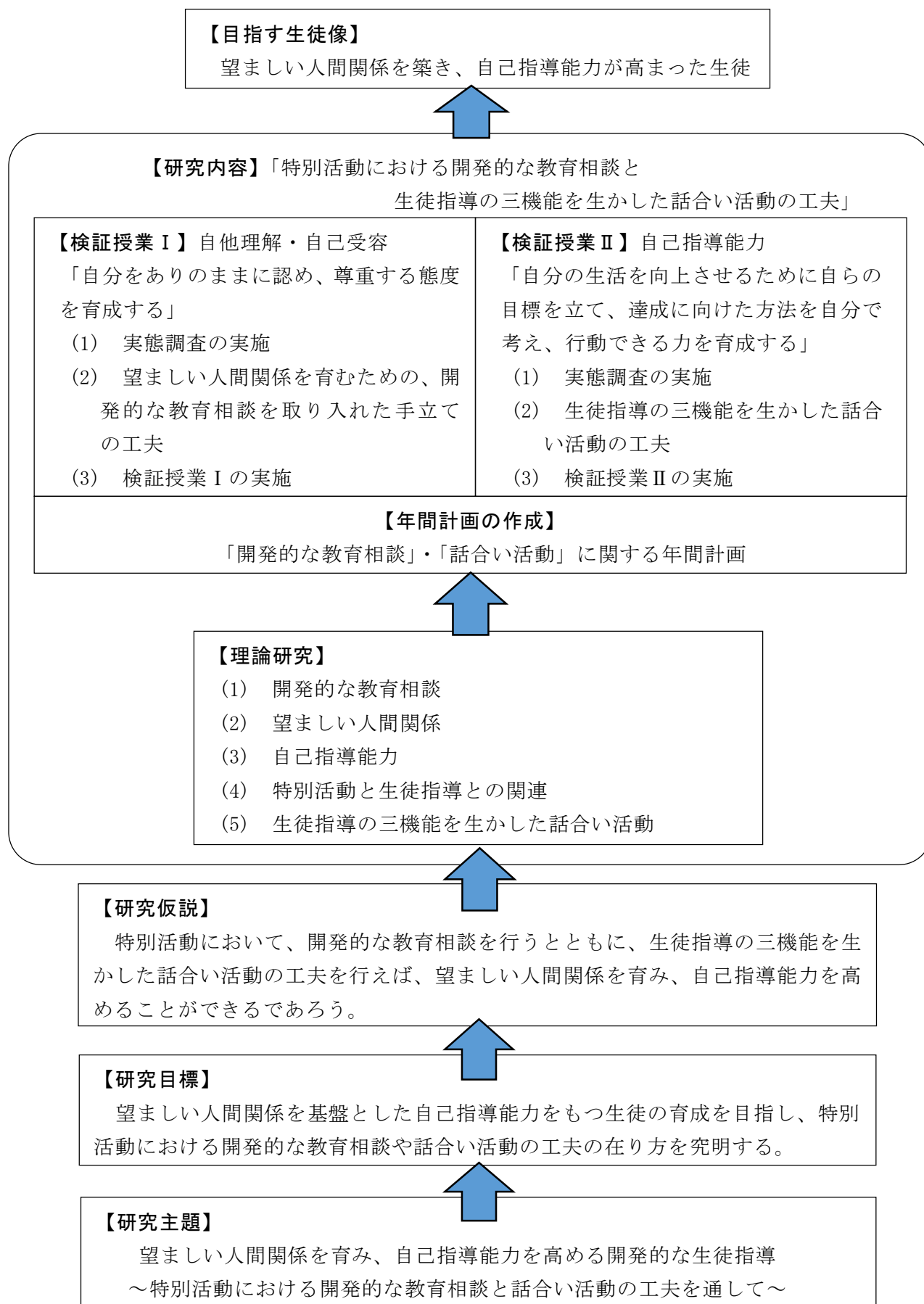
3 実践研究

- (1) 「開発的な教育相談」・「話し合い活動」に関する年間計画の作成
- (2) 検証授業Ⅰ「望ましい人間関係を育む開発的な教育相談を取り入れた授業」
- (3) 検証授業Ⅱ「生徒指導の三機能を生かした話し合い活動を取り入れた授業」
- (4) その他の実践

VI 研究計画

月	研究内容	研究事項	研究方法	備考
4	○研究の方向性	○研究主題・副題・仮説の設定 ○研究内容・研究計画の設定	○文献研究 ○理論構築	
5	○理論研究 ○意識調査	○理論の構築、研究概要の設定 ○意識調査の実施・分析	○文献研究 ○意識調査の集計・分析	宮崎市立 宮崎西中学校
6	○実践研究 ○検証授業Ⅰの構想	○年間計画の作成 ○検証授業Ⅰの内容検討・準備	○文献研究 ○アンケート調査・分析	
7	○実践研究Ⅰ	○検証授業Ⅰの実施・分析	○アンケート調査・分析	宮崎市立 宮崎西中学校
8	○研究の整理	○グループ協議会の事前準備	○発表内容の整理	
9	○グループ協議会 ○検証授業Ⅱの構想	○グループ協議会中間発表 ○検証授業Ⅱの内容検討・準備	○文献研究 ○文献研究	
10	○実践研究Ⅱ	○検証授業Ⅱの実施・分析	○アンケート調査・分析	宮崎市立 宮崎西中学校
11	○研究のまとめ	○全体協議会事前準備		
12	○全体協議会	○全体協議会中間発表	○発表内容整理	
1	○研究のまとめ	○研究の成果と課題 ○研究報告書の作成		
2	○研究のまとめ	○研究発表会事前準備	○発表内容再検討	
3	○主題研究発表会	○研究のまとめと反省	○内容の整理	

Ⅶ 研究構想



Ⅷ 研究の実際

1 理論研究

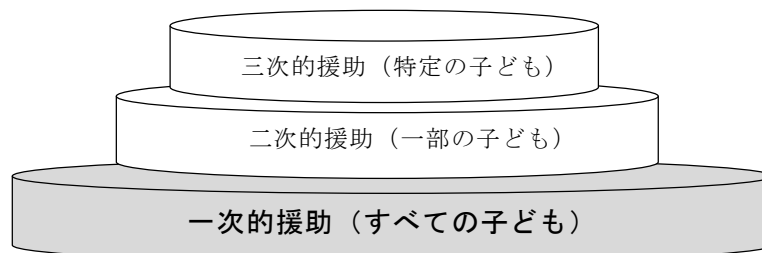
(1) 開発的な教育相談

生徒指導とは、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行う教育活動である。この生徒指導には、「生徒の成長を促す」「問題を予防する」「問題を解決する」という3つの目的がある。本研究では、成長を促す指導を「開発的な生徒指導」と定義する。

生徒指導提要では教育相談を、「児童生徒それぞれの発達に即して、好ましい人間関係を育て、生活によく適応させ、自己理解を深めさせ、人格の成長への援助を図るものであり、決して特定の教員だけが行う性質のものではなく、相談室だけで行われるものでもない」としている。そして、教育相談を行うためのスキルとして「問題を解決する」「問題を未然に防ぐ」「心の発達をより促進させる」の3つが必要であるとしている。その中でも、「心の発達をより促進させる教育相談」については、育てる（発達促進的・開発的）教育相談という考え方として、現在様々な考えや方法が導入され、試行されている段階である。

筑波大学副学長の石隈利紀氏（以下、石隈）は、「学校心理学」において、一人一人の子どもの様々な問題状況の解決を援助し、成長を促進する活動を、心理教育的サービスと定義し、【図1】のように3段階に整理している。その中で、一次的援助については「すべての子ども」に対しての発達・促進的援助としている。

【図1】3段階の心理教育的サービス及びその対象（石隈）



一方、生徒指導提要では、何事も生じていないときの働きかけや、児童生徒のよいところを常に発見する姿勢の大切さが強調されており、学級の雰囲気づくりに対する教師の果たす役割は大きいとしている。これらを踏まえ、本研究では開発的な教育相談を以下のように定義し、研究を進めることにした。

開発的な教育相談＝教師が行う、すべての生徒を対象にした、成長を促す教育相談

また、開発的な教育相談として活用できる主なグループアプローチと、その効果について【表1】のように整理した。

【表1】グループアプローチの種類とその効果

グループアプローチの種類	効 果
構成的グループエンカウンター	人間関係づくりや相互理解、協力して問題解決できる力を育てる。
ソーシャルスキルトレーニング	考え方を広げ、気持ちを調節し、行動のレパートリーを増やす。
アサーショントレーニング	自分も相手も大切にし、自分の言いたいことを相手を尊重しながら伝える。
ピア・サポート	「お世話活動」などを通して異年齢交流等を実施し、年長者が自己有用感を獲得できるようにする。
アンガーマネジメント	怒りの対処法を段階的に学ぶ。
ライフスキルトレーニング	危険行動を避け、よりよい人間関係を育むためのスキルを学ぶ。
キャリアカウンセリング	生き方や進路、教科等の選択に関する悩みや迷いなどを受け止め、自己の可能性や適性についての自覚を深める。

(2) 望ましい人間関係

中学校学習指導要領解説特別活動編（平成20年 文部科学省）では、望ましい人間関係について、「豊かで充実した学級生活づくりのために、生徒一人一人が自他の個性を尊重するとともに、集団の一員としてそれぞれが役割を果たし、互いに尊重しよさを認め発揮し合えるような開かれた人間関係である」と示している。そこで、本研究では、望ましい人間関係を築くために、次の力を育てたいと考えた。

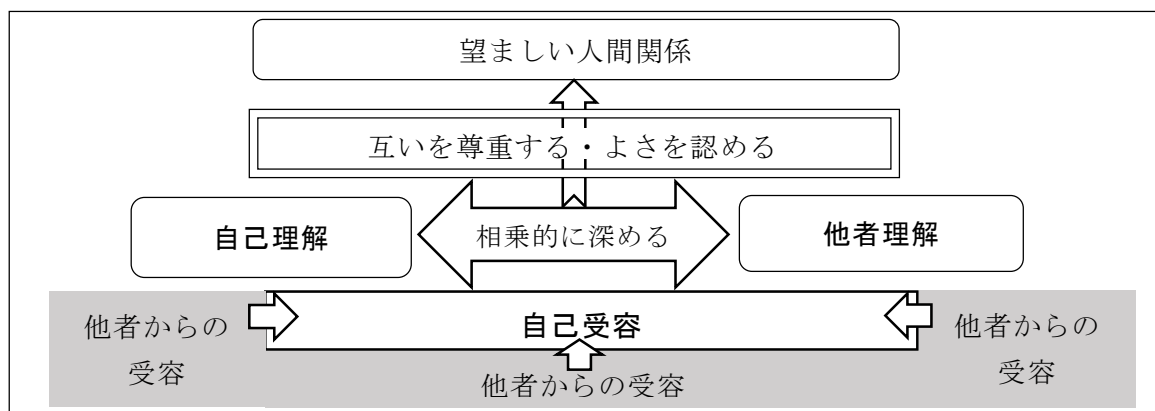
自分や他人のよいところを理解（肯定的な自己理解・他者理解）することができる力
自分の長所も短所もそのまま認め、受け入れること（自己受容）ができる力

このことについて早稲田大学教育・総合科学学術院教授の河村茂雄氏（以下、河村）は次のように述べている。

両者（自己理解と他者理解）は相乗的に深まっていく。自己を理解するためには、自分を対象化するための他者が必要不可欠であるし、他者を理解するためには、その試みをしている自己のありように大きな影響を受けるので、自己理解ができていなければ真の他者理解にはならないからである。自己理解と他者理解が十分深まっている人は、どういう人であろうか。それは自己受容が十分できている人である。…（中略）…では、自己受容ができている人とは、どういう人であろうか。それは、いままでに十分に他者から受容される体験をしている人であろう。その中で、自分は自分でいいと、等身大の自分が受容できるのである。（構成的グループエンカウンター事典 図書文化社）

このことから、【図2】のように、他者から受容される体験を積み重ねることで自己受容を促進し、それを基盤として自他理解を相乗的に深めることで、互いを尊重し、よさを認め合えるような望ましい人間関係を育むことができるのではないかと考える。

【図2】望ましい人間関係



(3) 自己指導能力

生徒指導資料（昭和63年3月 文部省）では、自己指導能力を次のように示している。

自己をありのままに認め（自己受容）、自己に対する洞察を深めること（自己理解）。
これらを基盤に自らの追求しつつある目標を確立し、また明確化していくこと。そして、この目標の達成のため、自発的、自律的に自らの行動を決断し、実行する能力。

また、生徒指導提要では、この自己指導能力の育成を図るため、次の3つの事柄に留意するよう求めている。生徒指導は機能であるため、この3つの事柄を生徒指導の三機能として捉え、本研究においても、生徒の自己指導能力を高めるために生かしていくことにする。

- ① 児童生徒に自己存在感を与えること
- ② 共感的人間関係を育成すること
- ③ 自己決定の場を与え、自己の可能性の開発を援助すること

(4) 特別活動と生徒指導との関連

生徒指導リーフ「特別活動と生徒指導」（平成24年6月 国立教育政策研究所）では特別活動を「生徒指導にとって最も重要な教育活動の場」としており、特別活動の特質である「望ましい集団活動」について、次のように示している。

- ① 一人一人が役割を分担し、協力して取り組んだり、一人一人の自発的な思いや願いを大切にしてお互いに取り組んだりすることにより「**自己存在感**」が与えられる。
- ② 協力し助け合って取り組んだり、互いのよさを認め合って取り組んだりすることなどにより、児童生徒相互の「**共感的な人間関係**」が育つ。
- ③ 自己の生活改善や進路などに関する「**自己決定**」の場や機会を多く設けることにより、児童生徒に自己実現の喜びを味わわせることができる。

このことから、生徒指導の三機能を生かした望ましい集団活動ができれば、生徒一人一人のよさや個性を伸ばすとともに、望ましい人間関係を築く力や自己指導能力を育むことができると考え、本研究では特別活動における実践に取り組むことにした。

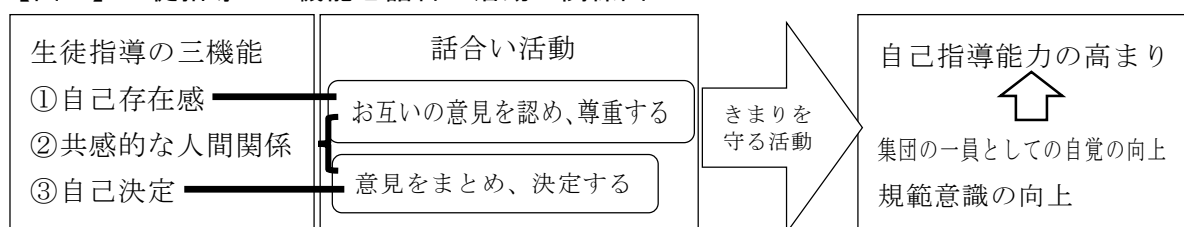
(5) 生徒指導の三機能を生かした話し合い活動

自己指導能力を育むためには、自分たちの学級や学校生活を向上させるために進んで話し合い、決定したことを協力して実現しようとする態度の育成が必要だと考えた。中学校学習指導要領解説特別活動編では、「よりよい生活を築くための諸活動の充実」として次のように示している。

- ア 集団としての意見をまとめるなどの**話し合い活動**を充実する。
- イ **自分たちできまりを守る活動**を充実する。
- ウ **人間関係を形成する力**を養う活動を充実する。

そこで本研究では、生徒指導の三機能を生かした話し合い活動を行うことで、自分たちできまりを守る活動を充実させ、自己指導能力を高めたいと考えた。話し合いの過程においては、生徒が共感的な人間関係の下で自己存在感を味わいながら、最終的に自己決定を行っていく手立てを講じる。意見をまとめる段階では、対立が生じることも予想されるが、それを乗り越えることで問題解決をする方法を身に付けることが期待できる。また、話し合い活動によって決定した集団や個人のきまりを守る活動を通して、集団の一員としての自覚とともに、規範意識も同時に高めることができる。その関係は【図3】のとおりである。

【図3】生徒指導の三機能と話し合い活動の関係図



2 実態調査及び分析

(1) 自己肯定感に関するアンケート調査

自己肯定感について、生徒の実態を次の2つの調査を基に分析した。

【表 2】平成 25 年度全国学力・学習状況調査生徒質問紙（全国）

「自分にはよいところがあると思いますか」		「自分の行動や発言に自信をもっていますか」	
あてはまる	23.6%	あてはまる	11.9%

【表 3】高校生の心と体の健康に関する調査（財団法人日本青年研究所 2011 年 3 月）

	「私は価値ある人間だと思う」	「私は自分を肯定的に評価するほうだ」
	「あまりそうでない」「全然そうでない」という否定的な回答をした割合	
アメリカ	9.6%	22.0%
中国	12.0%	17.1%
韓国	24.7%	29.2%
日本	62.7%	61.5%

【表 2】の「平成 25 年度全国学力・学習状況調査」では「自分によりよいところがありま
すか」という問いに対して「あてはまる」と答えた生徒が 23.6%となっており、4 人
に 1 人以下の割合である。また「自分の行動や発言に自信をもっていますか」という問
いに対しては、肯定的な回答の割合がさらに低くなっている。また【表 3】の「高校生
の心と体の健康に関する調査」では、「私は価値ある人間だと思う」「私は自分を肯定的
に評価するほうだ」という項目において、日本の高校生は自分を否定的に捉えている割
合が非常に高いということが分かる。

この 2 つの調査を受け、宮崎市立宮崎西中学校第 2 学年で実施したのが【表 4】の自
己肯定感に関するアンケート調査である。

【表 4】自己肯定感に関するアンケート調査（宮崎市立宮崎西中学校第 2 学年）

設 問	「はい」と答えた割合
① 自分のことが好きですか？	29.1%
② 自分に満足していますか？	26.3%
③ 自分の短所をなくしたいとよく思いますか？	65.5%
④ 自分が他の人にどう思われているか気になりますか？	55.2%

設問①～③の結果より、自分のことを肯定的に捉えている割合が全体的に低く、全国
の調査と同様、今の自分を受け入れられていないという現状を把握できた。また④の結
果より、学級の半数以上の生徒が、他人からどう思われているのか気になると答えてい
ることから、人間関係に不安をもっていることが分かる。このことから、生徒の自己肯
定感を高め、自他理解・自己受容を深める手立てが必要だということが分かった。

(2) Q-U 検査

Q-U 検査とは、河村が開発した質問紙で、生徒達の学級生活での満足感と意欲、学
級集団の状態を測定するものである。学級におけるルールとリレーションの確立の様子
を知り、本研究の目指す生徒像に迫るため、実施した。

ルール	学級内の対人関係に関するルール、集団活動・生活をする際のルール。 定着していれば、対人関係のトラブルは減少し、友達との交流も促進される。
リレーション	互いに構えない、ふれあいのある本音の感情交流のある状態のことである。 生徒同士に仲間意識が生まれ、集団活動が協力的に、活発になされる。

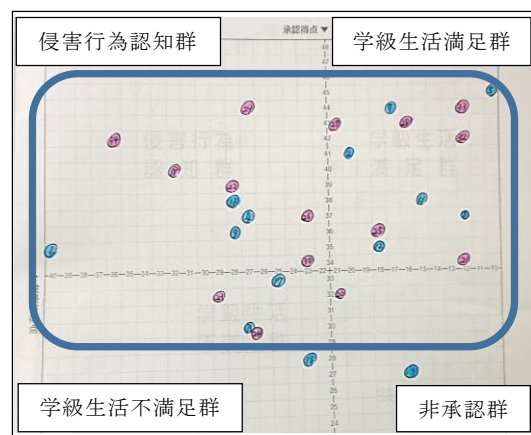
ルールとリレーションが同時に確立されている集団
親和的な人間関係があり、主体的に生き生きと
活動できる学級集団



めざす生徒像
よりよい人間関係を築き、自己
指導能力が高まった生徒

対象学級は第2学年（男子17名、女子17名）である。検査の結果では【図4】のように学級生活満足群38.7%（全国平均37.0%）学級生活不満足群19.3%（全国平均31.0%）という結果となり、全国平均を上回っていることが分かる。しかし、侵害行為認知群は35.4%（全国平均15.0%）と高い割合を示した。このように、侵害行為認知群と学級生活満足群にまたがり、横長に伸びたグラフに表される学級を「なれあい型」という。これは学級内で悪ふざけやトラブルが起こっている可能性が高いことを示し、その要因として、自己中心的で、友達的心情を理解せずに行動してしまう生徒がいることが考えられる。このことから、他者理解を促進する取組を行う必要があることが分かった。

【図4】検証授業実践学級におけるQ-U検査



3 実践研究

(1) 「開発的な教育相談」・「話し合い活動」に関する年間計画の作成

学級集団の発達段階に応じた開発的な教育相談と話し合い活動の系統的な指導を行うため、年間計画【表5】を作成し、その中に検証授業Ⅰ・Ⅱを位置づけた。

時期 (期間)	学級集団 の発達段階 (活動人数)	強化の方法	開発的な教育相談 グループアプローチ（ねらい・タイトル名等） SGE：構成的グループエンカウンター SST：ソーシャルスキルトレーニング	話し合い活動 (対象)	主な学校行事
4月 (1か月)	混沌・ 緊張期 (ペア)	教師による肯定的評価	SGE（集団で活動する喜び「自己紹介ビンゴ」「団結くずし」「質問じゃんけん」「理想のクラスを絵に」） SST（相手に聞こえるような話し方、上手な聴き方）	学級目標の決定（学級）	対面式
5月 (1か月)	小集団 成立期 (3～4人)	3～4人の仲間からの承認	SGE（集団で活動する喜び「すごろくトーキング」「何でもバスケット」「プレーンストーリーミング」） SST（友達との約束は守る、一生懸命やって失敗したときは許す）	クラスマッチを成功させよう（学級）	クラスマッチ
6月～7月 (2か月)	中集団 成立期 (6～8人)	級友からの言葉による承認	SGE（自己理解・自己受容「二者択一」「いいところさがし」「リフレーミング」「ヘルプ・ミー」） SST（あたたかい言葉かけ） アサーショントレーニング （自分の言いたいことを、相手を尊重しながら伝える）	生徒総会の全体議題に関連付けて（学級→全校）	生徒総会
検証授業Ⅰ					
9月～11月 (3か月)	全体集団 成立期 (クラス全体)	級友からの言葉による承認	SGE（自己理解・自己受容「私たちの得た宝物」「応援メッセージ」「いいところ四面鏡」） SST（やさしい頼み方・上手な断り方・自分を大切にすること） アンガーマネジメント （怒りの発散法）怒りを発散する方法を出し合う）	合唱コンクールを成功させよう（学級）	体育大会 合唱コンクール 修学旅行
検証授業Ⅱ					
12月～3月 (4か月)	自治的集団 成立期 (クラス全体)	級友からの言葉による承認	SGE（自己理解・自己受容「Xさんからの手紙」「別れの花束」） SST（問題を解決する） キャリアカウンセリング （自分を知り、将来の生き方について考える） ライフスキルトレーニング （喫煙、飲酒、薬物、性などの課題に対応）	日常生活に関連付けて（学級）	立志式 卒業式

【表 5】「開発的な教育相談」・「話し合い活動」に関する年間計画（第 2 学年）

河村は、学級集団育成の段階を、多様なペアでの活動を通して良好な二者関係を成立させる「混沌・緊張期」、3～4 人の小集団によるグループ活動を通してリーダー体験や役割分担、認め合いを行う「小集団成立期」、6～8 人程度の中集団で活動に取り組み、リーダーシップとフォロアーシップを学ばせる「中集団成立期」、中集団をつないで学校行事に取り組み、みんなで活動する楽しさや意義とその方法を学ばせる「全体集団成立期」と示している。各段階に応じた指導を行うことで、最終的な目標である「自治的集団」が育成され则认为る。

また、学校行事に開発的な教育相談と話し合い活動を関連させ、生徒による自主的、実践的な活動を充実させる。開発的な教育相談を用いて、学校行事の事前指導では、集団の結束とやる気を高め、事後指導では、活動で頑張ったことや感想を共有させたい。さらに、話し合い活動で、自分たちの学級や学校生活を向上させる力を育みたい。本研究では、これらのねらいを踏まえた年間計画と実態調査を基に、望ましい人間関係を育むことを目指した検証授業Ⅰ、自己指導能力を高めることを目指したⅡを実践することとした。

(2) 検証授業Ⅰの実際「望ましい人間関係を育む開発的な教育相談を取り入れた授業」

アンケートを分析した結果、人間関係に不安をもっているという現状を把握したことから、検証授業Ⅰの目標を自己受容、自他理解の促進とし、「自他をありのままに認め、尊重することができれば、望ましい人間関係を育むことができるであろう」という仮説の下、【表 6】のような実践を行った。生徒が、自分の長所を理解することで自己肯定感を高めるとともに、自分や友達の長所も短所もありのままに受け入れることで、望ましい人間関係を育むことを目指した。また、授業を進める中で、友達の力を借りながら自己理解を進めていく手立てを講じることで、他者理解も同時に進める工夫を行った。第 1 時では、「よいところさがし」というテーマで、開発的な教育相談の手法である構成的グループエンカウンターを用いて自分のよさに気付かせるという授業を行った。第 2 時では【表 7】のように、短所を長所に換えるリフレーミングの手法を用いて、他者からの受容により、自己受容を深めることを目指した。

【表 6】検証授業Ⅰ

授業の仮説

自他をありのまま認め、尊重することができれば、望ましい人間関係を育むことができるであろう。

実施日 平成 26 年 7 月 17 日（月） 対象学級 宮崎西中学校 2 年 2 組

検証の視点 ①肯定的な自己理解・他者理解が深まったか。

②他者からの受容により、自己受容が高まったか。

第 1 時

「よいところさがし」自己理解+他者理解

- (1) 自分のよいところを探して書く。
- (2) 友達のよいところを探して書く。
- (3) 構成的グループエンカウンター「あなたの印象」を行う。

生徒の感想

「よいところさがし」という活動をして、うれしかったことがたくさんあって、楽しかったです。なぜなら、みんながどういう風に自分のことを思っているのか、知りたかったからです。今日の勉強でよく分かりました。またやってみたいです。」

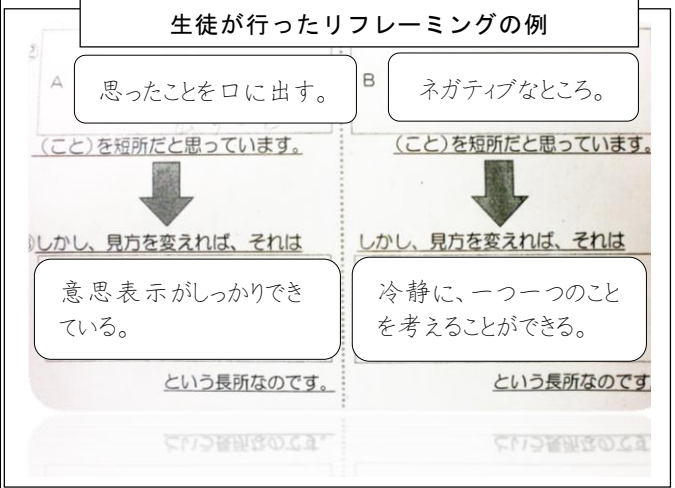
第 2 時（本時）

「リフレーミング」

自己受容

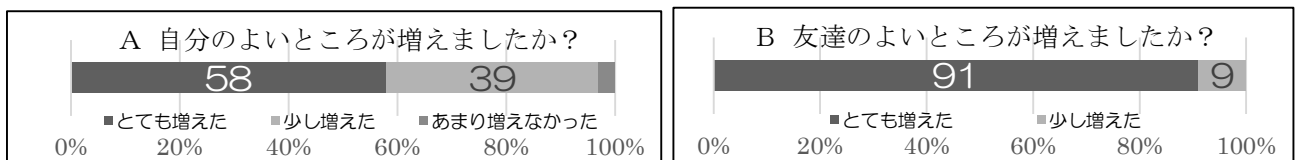
- (1) 自分の短所を書く。
- (2) 友達に、自分の短所を長所に言い換えてもらう。
- (3) 感想を共有する。

【表 7】第 2 時の授業の流れと指導のポイント

段階	学習内容及び生徒の活動	指導のポイント
導 入	1 アイスブレイキングをする。 2 本時のねらいを確認する。 リフレーミング ～短所を長所に変えよう～	① アイスブレイキングで協力して活動する雰囲気をつくる。
展 開	3 「リフレーミング」を行う。 4 ワークシートに自分の性格で短所だと思っているものを書く。 5 ペアをつくり、短所を長所に書き換える。 6 書き換えた内容を、本人に伝える。 	② 友達のために悩むことに大きな価値があることを知らせる。 
終 末	7 シェアリングを行う。 8 自己理解、自己受容について考えを広げる。	③ グループで感想を出し合った後、ワークシートに記入させる。ワークシートを回収した後、特に自己受容が高まったことがうかがえる感想を教師が読み、ものの見方は1つではなく、短所も長所になることを伝える。

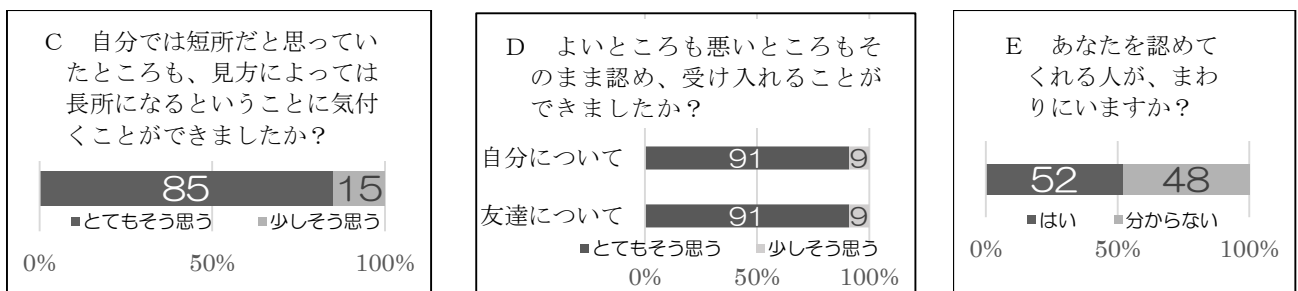
ア 授業実践Ⅰ終了後にとったアンケート結果からの考察

(ア) 検証の視点①「肯定的な自他理解」について



項目 A の結果から、「とても増えた」と答えた生徒が半数を超えており、「少し増えた」と答えた生徒も含めると、ほぼ全員が授業を通して自分のよいところを見付けることができたことが分かる。項目 B の結果から、友達のよいところについては、検証授業前より高い割合で、他者を肯定的に捉える姿勢が身に付いていることが分かる。

(イ) 検証の視点②「自己受容」について



項目Cの結果から、リフレーミングを行ったことで、多くの生徒が自分の短所に対する見方を変えることができたことが分かる。また、項目Dの結果から、自己受容が促進されていると同時に、友達のことについても受け入れることができている割合が高いことから、他者からの受容により、自己受容が高まっていることがうかがえる。

項目Eより、「はい」と「分からない」がほぼ同数で、本当に自分が認められているのかについては、自信がない生徒が多いことが分かる。

イ 授業実践Ⅰの成果

- 多くの生徒において、自分の短所に対する見方を変え、ありのままの自分を受け入れようとする姿がみられた。
- リフレーミングの巧拙よりも、友達のために悩み考えることを重視した結果、自分のために一生懸命考えてくれたことを実感し、多くの生徒の自己存在感が高まった。
- 友達の短所を長所に言い換える活動を通して、他人を受け入れようとする態度を養うことができた。

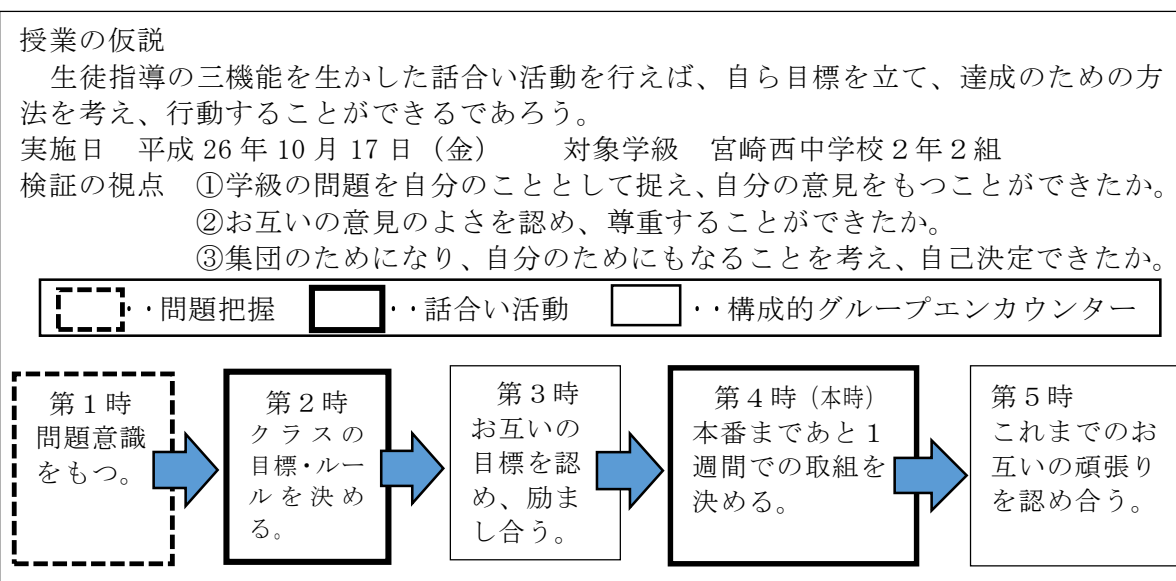
ウ 授業実践Ⅰの課題

- 自分のよいところにあまり気付けなかったと答えた生徒が、検証前と検証後で同じ人数（3名）いたことから、これらの生徒への個別指導を行う必要がある。
- 自分は他者を受容しているつもりだが、自分が他者から受容されているかについて不安に感じている生徒が多いということから、検証授業Ⅱでも継続して人間関係づくりを行う必要がある。

(3) 検証授業Ⅱの実際「生徒指導の三機能を生かした話合い活動を取り入れた授業」

検証授業Ⅱを、「生徒指導の三機能を生かした話合い活動を行えば、自ら目標を立て、達成のための方法を考え、行動することができるであろう」という仮説の下、【表8】のように実践を行った。合唱コンクールにおける自主的、自発的な活動の充実を通して自己指導能力を高めることを目指した。

【表8】検証授業Ⅱ



ア 授業の実際

話し合い活動の事前準備として、【表 9】のように、計画委員会を 2 回実施した。

計画委員会とは、話し合いの計画や準備、司会や記録の役割を担い、話し合いを主体的に進めるための組織である。第 1 回計画委員会では、合唱コンクール実行委員に加えて、学級をまとめる立場として学級委員長、副委員長、書記が参加し、議題の選定や提案理由の作成、学級の実態把握を行った。また、第 2 回計画委員会は、第 1 時「問題意識をもつ」を受け、学級の生徒がどのような意見をもっているのかをあらかじめ把握し、話し合いの進行についてのシミュレーションを行った。第 2 回計画委員会にはパートリーダーも参加し、合唱コンクールに向けての取組について、改善すべき点などの意見交換を行った。今回の話し合いは、司会者を学級委員長と副委員長にし、司会をするに当たって特に難しいと思われる「意見をまとめる場面」についてプリント【表 10】を用いて確認を行った。

【表 9】計画委員会

第 1 回計画委員会 委員（学級委員長、副委員長、書記、合唱コンクール実行委員）計 5 名 9 月 18 日（木）昼休み	
① 議題の選定	学級全体にアンケートをとり、計画委員会が議題を選定 決定事項 ①合唱コンクールに向けての目標を立てる。 ②目標を達成するために必要な学級のルールを考える。
② 提案理由の作成	「今、クラスは合唱コンクールに向けての取組がばらばらという状態なので、合唱コンクールの目標とルールを考え、一致団結して取り組めるクラスとなっていけるようにしたいと思い、この議題を提案しました。」
③ 実態把握	計画委員会で、議題に対する学級の実態についての意見交換
第 2 回計画委員会 委員（学級委員長、副委員長、書記、合唱コンクール実行委員、パートリーダー）計 10 名 9 月 29 日（月）昼休み	
- 話し合いの進行について 司会者と話し合いのシミュレーション（意見をまとめる場面についての確認） - 合唱コンクールへの取組についての現状把握 前回のメンバーにパートリーダーを交え、合唱コンクールへの取組についての意見交換	

【表 10】話し合い進行のポイント（一部掲載）

計画委員に渡した話し合いの流れについてのプリント内容（一部掲載）
【意見をくればあう】「分かり合う」「聞き合う」ことを大切にしながら、少しずつまとめていく。 ○ どの意見がよいか、理由もふくめて発表してもらおう。 ○ 意見に対する質問を聞く。 ○ 両方のよいところを合わせたものにできないか、考えてもらう。 ○ 両方のよいところを取り上げて、新しいものにできないか、考えてもらう。
【まとめる（決める）】安易な多数決は避け、全員が納得できる考えでまとめていく。 1 つにまとめるのか、2 ～ 3 つにするのかについても意見を聞く。 （例）「A という意見が多いので、A に決めてもいいですか。」 「A と B の 2 つに決めてもいいですか。」 「A と B の意見を合わせて C という考えに決めてもいいですか。」 → もし、みんなから「多数決」という意見が多く出たら、「多数決で決めてよいですか？」と確認する。もし反対がでなければ、多数決で決める。

第 1 時では、導入場面で、あらかじめ撮影しておいた合唱コンクールの練習風景をクラスで視聴した。その後、9 月から始まった合唱コンクールの練習を振り返ってクラスの取組を評価し、その理由を発表し合った【表 11】。

この活動を通して、クラスの問題を自分の問題と捉えさせ、第 2 時での話し合い活動に向けて、自分の意見をもたせることをねらいとした。

【表 11】合唱コンクール練習についての自己評価とその理由

よくできている	2名	・昼休みも練習しているし、実行委員もがんばっている。 ・みんなで協力して練習している。
まあまあ	24名	・まだ恥ずかしがっている。 ・声が出ていない。 ・注意しても聞かない。 ・口が開いていない。 ・歌詞を覚えていない。 ・練習から本気でしていない。
まだまだである	2名	・練習時間が短く、みんなが集中しているわけではない。 ・改善点を見付けようとせず、ただ歌っているだけ。
指導のポイント それぞれがクラスの大切な一員であるということを伝え、クラス全体の問題を自分のこととして考えさせるようにする。		

第2時では、生徒指導の三機能を生かした話し合い活動にするため、3つのポイントを提示して話し合いを進めさせた。授業の実際は【表 12】のとおりである。

【表 12】第2時の学習内容及び生徒の活動と指導のポイント

	学習内容及び生徒の活動	指導のポイント
導入	1 話し合いの3つのポイントを知る。	① 今回が初めての話し合い活動だったため、次の3つのポイントに留意して進めるよう知らせる。
展開	2 学級の合唱コンクールへの取組の現状を知る。	1 自分の意見をもつ 2 友達の意見のよさを見付ける 3 意見を比べ、折り合いを付ける
開	3 議題を確認し、提案理由を聞く。	② 意見が議題から外れそうなときは、提案理由に戻り、考えるよう促す。
ま	4 合唱コンクールへ向けての学級目標を決める。	【話し合いの3つのポイントと生徒指導の三機能との関連】
と	5 目標達成のための学級のルールを決める。	
め	集団決定したこと 【学級目標】 学年優勝を目指してクラスが1つになり、思い出に残る合唱コンクールにしよう。 【ルール】 ① 恥ずかしがらず、全員で声を出す。 ② 練習も本番のように緊張感をもつ。	③ 自分達で集団決定、自己決定できたことを賞賛するとともに、決まったことを実行することの大切さについて話す。
	6 個人目標を決める。	
	7 先生の話聞く。	

【図 5】合唱がんばりカード

【第1週】私が決めた目標

10月8日(水)	10月9日(木)	10月15日(水)	10月16日(木)	10月17日(金)
8点 10点	8点 10点	8点 10点	8点 10点	8点 10点
理由 も、口が大きい 思ったが	理由 も、口が大きい は、	理由 口をあけて!	理由 口がもってあか た	理由 強弱をもっと つけた
級友からの 応援メッセ ー 「がんばれ、 1週間頑張ろう」	級友からの 応援メッセ ー 「がんばれ、 1週間頑張ろう」	級友からの 応援メッセ ー 「がんばれ、 1週間頑張ろう」	級友からの 応援メッセ ー 「がんばれ、 1週間頑張ろう」	級友からの 応援メッセ ー 「がんばれ、 1週間頑張ろう」

1週間の行動を振り返って、自分ががんばることができたところや、よくなってきたところを書こう。

口が「だんだん」とあいてきたりしたのかよかった。でも強弱にもっと強弱つけたほうがいいと思った。

自己評価の理由

級友からの応援メッセージ

活動の日常化への手立てとして「合唱がんばりカード」

【図 5】を用いた活動を行った。第2時の集団決定を受けて、自分の目標についても考えさせ、毎日帰りの会で活動を振り返らせた。このカードには、自分の立てた目標に対しての自己評価と、級友からの応援メッセージを記入させた。この活動を通して自己指導能力を高めるとともに共感的な人間関係を育み、活動意欲の向上をねらった。

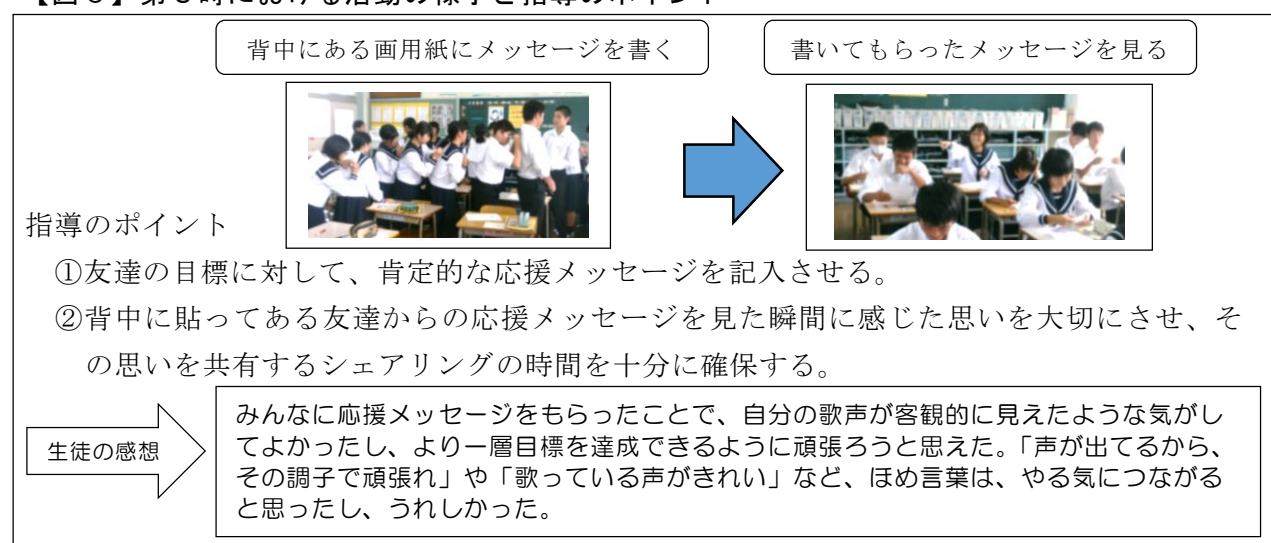
【表 13】生徒の自己評価とその理由

評価項目	検証の視点	できた
1 自分の意見をもつことができましたか？	問題意識(視点1)	100%
2 意見を進んで発表することができましたか？	自己存在感 共感的人間関係 (視点2)	21%
3 友達の意見のよさを見付けることができましたか？		100%
4 自分の意見と友達の意見を比べ、さらによりよい考えにできましたか？		93%
5 自分がこれから何をしたらよいのか分かりましたか？	自己決定(視点3)	96%

項目1の、自分の意見をもつことについては、全員が達成できており、第1時が生かされていることが分かる。項目3と4については、全員が達成できており、友達の意見を参考にして自分の考えをよりよくしている生徒も多かった。その一方で、項目2については、進んで発表できたと答えた生徒は21%となっており、積極的に発表できなかった生徒が多くいたことが分かる。このことから、発表については、第4時の話し合いに向け、手立てを講ずる必要があると考えた。項目5については、自分達で決定した目標やルールのため、ほとんどの生徒がこれから実行する内容を理解していることが分かる。今回の話し合いでは多数決ではなく、折り合いを付けながら意見をまとめ、決定することができていた。

第3時では、お互いの目標を認め、励まし合う「友達への応援メッセージ」という活動を行った。生徒の背中に貼り付けた合唱コンクールに向けた個人目標に対して、級友同士で応援メッセージを書いた。自分の目標に対して共感的なメッセージを書いてもらったことで、生徒はうれしそうな表情を浮かべていた。

【図6】第3時における活動の様子と指導のポイント



第4時での話し合いを前に、第2時での話し合いの振り返りにおいて評価の低かった「進んで発表すること」について、次のような改善の手立てを講ずることにした。

- ① ワークシートに書かせた生徒の意見を相互に見せ合いながら、よい意見だと思うところにアンダーラインを引かせる。
- ② 全体の場合だけでなく、グループでの発表も大切な発表の場だということを伝える。

これらの手立てを講ずることで、生徒は自分の意見に自信をもって発表することができるのではないかと考えた。第4時では、合唱コンクールまで残り1週間という期間の中で、クラスとしてどのような取組ができるのかを話し合う活動を行った。授業の流れと指導のポイントは【表14】のとおりである。

【表 14】第 4 時の授業の流れと指導のポイント

段階	学習内容と生徒の活動	指導のポイント
導入	1 議題を確認する。 「残り 1 週間で取り組む具体策を決めよう」	① グループでの発表も、大切な発表の場だということを伝える。
展	2 話し合いをする。 ① 現時点の問題点の確認 × まだ恥ずかしがっている人がいる。 × 声が出ていない。 × 練習から本気ではない。 ○ 注意しても聞かない人がいる。 ○ 歌詞を覚えていない。 × 口が開いていない。 × 練習時間が短く、全員が集中してわけではない。 × 改善点を見付けようとせず、ただ歌っているだけ。 (○：改善済み、×：改善されず)	② パートリーダーが、現在のクラスの課題について発表することで、全員に問題意識をもたせるようにする。
開	② 問題点を踏まえ、「あと 1 週間でできること」をワークシートに記入する。 ③ 小グループをつくり、友達の意見のよいところを見付ける。 ④ 意見を出し合う。	③ ワークシートを見せ合い、お互いの意見のよいところに線を引かせることで、自己存在感を与え、共感的人間関係を育む。
まとめ	①口を開けることを心がける ②一生懸命にする ③練習量を増やす ④自分たちで曲の強弱を考える ⑤本気の練習をする 3 意見を比べ、まとめる。 ※発言記録は【表 15】を参照 4 先生の話聞く。 5 自分の目標と具体策を考える。	④ それぞれの意見を比べ合いながら、折り合いを付けさせる。 ⑤ 話し合いにおいて、よかったところを賞賛し、今後に向けての改善点についても伝える。 ⑥ 集団決定したことを基に、自分はどのような目標を立て、取り組むのか自己決定させる。活動の評価は、引き続き「合唱がんばりカード」で行わせる。

【表 15】学習指導過程（3）「意見を比べ、まとめる段階（一部掲載）」での発言記録

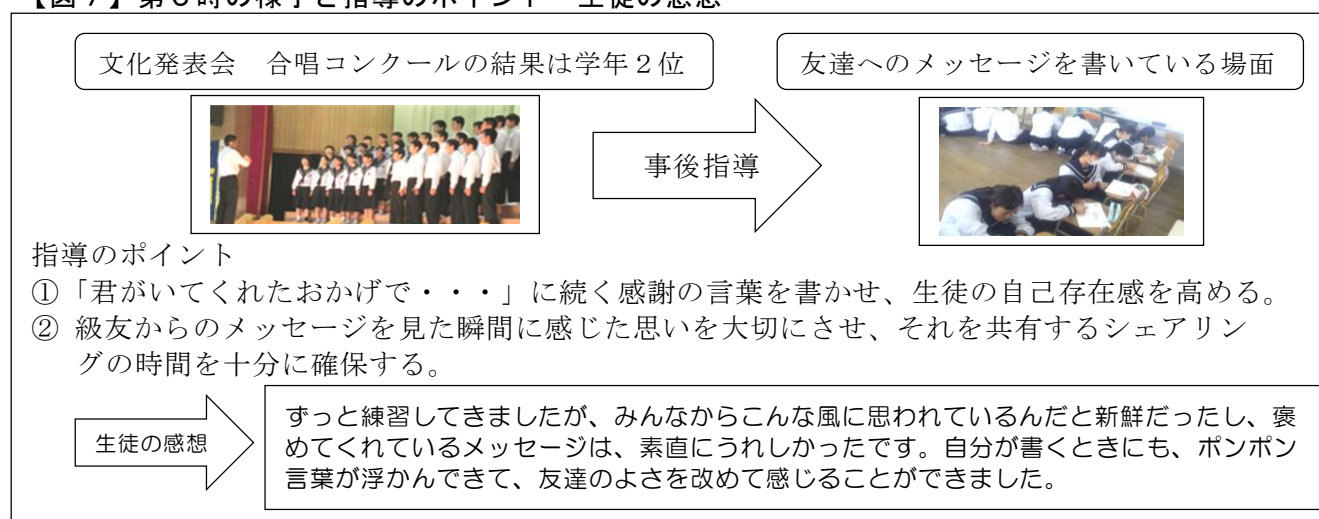
発言の視点					生徒の発言
口開ける	一生懸命	練習量増	曲の強弱	本気	
	○	○			【生徒 A】「練習量を増やす」と「一生懸命にする」をまとめた方がいいと思います。一生懸命やっても、練習量を増やさなければ上達しないと思うからです。
○			○		【生徒 B】僕は「口を開けること」を先にやって、それができたら「強弱」をつけたりするなど高度なことに取り組んでいけばいいと思います。
○					【生徒 C】僕は「口を開けること」については、当たり前なことなので、意見から省けばいいと思います。
○					【生徒 D】「自分では口を開けているつもり」という人も多いので、口を開けることについて賛成です。具体的には「テスト」をしたらいいと思います。
	○			○	【生徒 E】私は「本気の練習をする」と、「一生懸命する」というのは、あまり具体的ではないのもっと具体的にしようがいいと思います。
	○			○	【生徒 F】私も同じ意見です。もっと具体的に決めなければ、口を開けるにしても、「本気」とか「一生懸命」とかの度合いが人それぞれ違うと思うからです。
○					【生徒 G】練習のときに、先生がビデオを撮ってくれているんですけど、それを見て口が開いているかどうかチェックするというのはどうですか？
○					【生徒 C】口が開いているかどうかは、みんなで歌っていくうちに分かるものなのでテストはしなくてもいいと思います。
○					【生徒 F】私は、ビデオを見たりしても、やっぱり口が開いていない人は開いていないので、口の開いている人から座らせていくなどの取組が必要だと思います。
○	○				【生徒 C】それだったら、「一生懸命やる」の具体策を、口を大きく開けるにすれば、みんなが一生懸命歌っているように見えるから、いいと思います。最低でも口に指が 3 本入るくらい開けるように練習するのがいいと思います。
○	○			○	【司 会】それでは「一生懸命やる」「本気の練習をする」の具体策として、「口を大きく開ける」。そして口が開いているかのテストをするということに決めてもいいですか？

【表 15】は、5つに絞られた意見を、折り合いを付けながら、まとめていく段階である。

本気や一生懸命という意見は抽象的で、そこに疑問をもった生徒の意見から、具体的な取組の決定へとまとまっていく様子が分かる。生徒Cは、はじめは口を大きく開ける、テストを行うという意見にも反対していたが、友達の見解を聞いていくうちに、複数の考えをまとめて、具体策を提案している。さらに、指3本入るくらい口を開けるという基準も示している。これは、級友の見解をよく聞き入れながら考えていた結果だと考える。

第5時には事後指導として【図7】構成的グループエンカウンター「私たちの得た宝物」を実施し、クラス一人一人の頑張りを認め、よさを賞賛し合う言葉を寄せ書きにして書かせた。お互いの寄せ書きを見て自己存在感を高めさせるとともに、これまでの活動に対する充実感を実感させることをねらいとした。

【図7】第5時の様子と指導のポイント・生徒の感想



イ 自己評価アンケートの分析

第4時終了後に自己評価アンケートを実施した。その結果は【表 16】の通りである。

【表 16】生徒の自己評価とその理由（第4時終了後）

評価項目			できたと答えた割合	
			第2時	第4時
1	自分の意見をもつことができましたか？	問題意識(視点①)	100%	100%
2	進んで発表することができましたか？	自己存在感	21%	73%
3	友達の意見のよさを見付けることができましたか？	共感的人間関係	100%	97%
4	自分の意見と友達の意見を比べ、さらによりよい考えにできましたか？	(視点②)	93%	83%
5	自分がこれから何をしたらよいのか分かりましたか？	自己決定(視点③)	96%	97%
自己評価の理由	項目1	- みんな、それぞれの意見を持ち、しっかりその意見に対して考えることができた。 - みんな自分の意見を一生懸命考えていた。また班でも協力して考えることができたので、よりよい意見を出すことができた。		
	項目2	- 前回よりも発表できたと思うから。自分の意見を積極的に班の人に伝えられたから。 - しっかりみんな、班で発表でき、これから何をすればよいかを考えることができた。目標に向けて、決まったことをしっかり守って頑張りたい。		
	項目3	みんながそれぞれ違う意見をもっていて、いろいろまとめるのが楽しかった。自分で考えて意見もよかったと思うけど、友達は違う意見で、でもとてもすごい、すばらしい意見があったので、話し合うってことは、大切なことだと思った。		
	項目4	- あと一週間、私達に何ができるのかをしっかりと考えることができたし、班のみんなと意見をまとめることができたから。 - 班の中で進んで発表し、みんなの意見と比べながら1つのよいアイデアにできた。		
	項目5	- 頑張って合唱がよりよくなるように考えて決定したので、それを実行できるようにしていきたい。 - この話し合いを通して、合唱コンクールに取組む姿勢が変わったと思います。これまでみんなで考え、決めたことをしっかりと実行していきたいです。		

(ア) 検証の視点①「問題意識」について

パートリーダーの発表などもあり、全員が自分の意見をもつことができたと答えていた。議題に対する問題意識をもつことができた結果だと考えられる。

(イ) 検証の視点②「自己存在感・共感的人間関係」について

「自分の意見を進んで発表できた」と答えた生徒の割合 73%となり、第2時の話し合い後の 21%を大きく上回っていた。特に「グループでは、全体の時よりも意見を進んで発表できた」という感想を書いていた生徒が多くいた。自分の意見のよさを事前に認めてもらったことで、自信をもって発表することにつながったと考えられる。

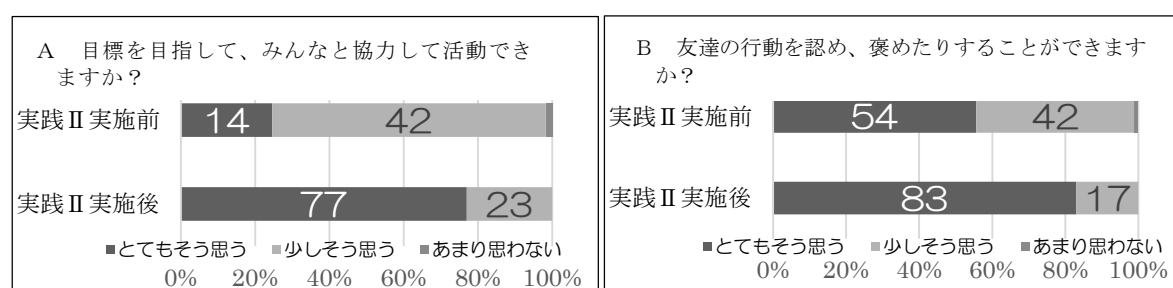
「自分の意見と友達の意見を比べ、さらにより考えにできた」と答えた生徒は全体の 83%となっており、第2時より低くなっているが、これは自己評価の基準が高まったことが理由として考えられる。

(ウ) 検証の視点③「自己決定」について

決まったことやこれから何をしたらよいのか分かった生徒がほとんどであった。話し合いを行い、集団決定に関わったことで、自分がこれから取り組むべきことも焦点化された結果だと考えられる。

ウ 授業実践Ⅱ終了後にとったアンケート結果からの考察

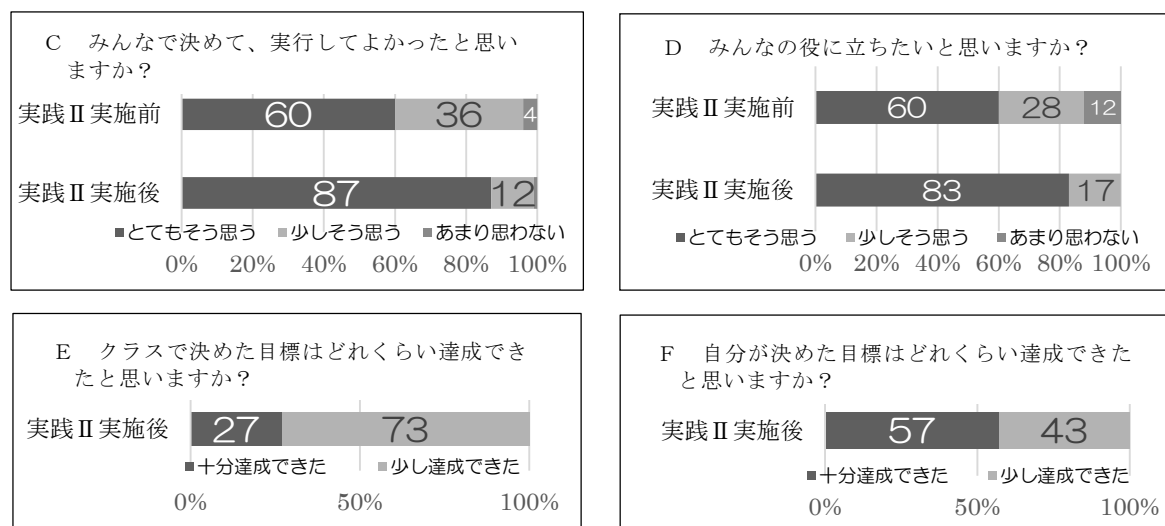
(ア) 共感的な人間関係について



生徒の感想	項目 A	「みんなと団結して、協力することの大切さを学んだ。協力し、団結したから2位になったと思った。」「みんなと協力して助け合っていくこと、目標に向かってみんなと頑張っていく楽しさなどを学んだ。」
	項目 B	「自分は陰で頑張っていたと思うけど、それもしっかりと見てくれていて、とてもうれしかった。みんな見ていてくれたんだと思いました。そして、自分もまわりのよいところを見て、学びたいと思いました。」

項目 A より、協力して活動できたという生徒が増えていることが分かる。生徒の感想では、「協力」を学んだという記述をした生徒が 16 名おり、多くの生徒が協力することの大切さを実感していることが分かる。項目 B から、友達の行動を認め、褒めることができるという生徒が増えている。お互いのよさを認め合う活動に取り組んだ効果がうかがえる。また、感想からは、自分のよさにも気付くことができたという記述が多く見られた。

(イ) 自己指導能力について



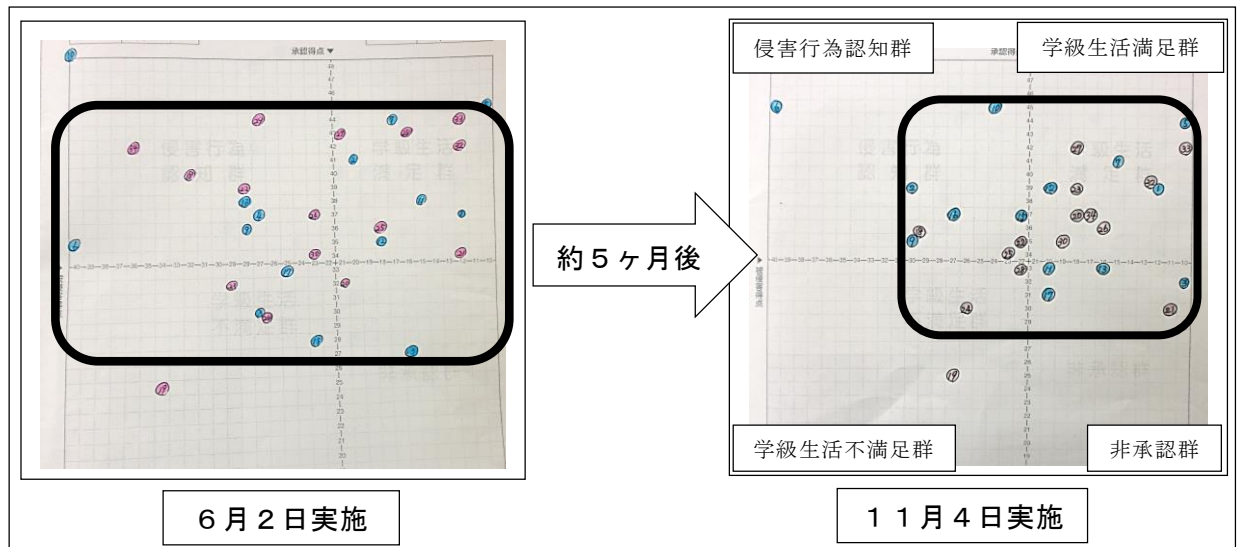
生徒の感想	項目 C	『『個人』じゃなく『みんなで』の方が達成感を大きく感じる事ができた。』『みんなと協力して歌うと、本番が終わった後、クラスの絆が深まることを学んだ。協力して何かを成功させることの大切さを学んだ。』
	項目 D	「私が学んだことは、一生懸命頑張ることは、とても素敵で楽しいことだということです。たとえ忙しくても、私はそれが一番の生きがいではないかと感じます。なので、他にもいろいろと係活動に積極的に関わろうと思いました。」
	項目 E	「クラスで目標を決めた日から、ずっと1つのことを意識しながら練習できた。」「目標の学年優勝はできなかったけど、合唱を通して思い出などがたくさんできてよかった。みんな1つになって歌えたと思う。」
	項目 F	「目標があると、練習をより頑張れるので、毎回意識して取り組めた。」「練習してきたことを生かせたのでよかったと思うけど、声はもう少し大きく出せた。」

項目Cについて、「みんなで決めて、実行してよかった」と感じた生徒の割合が大幅に増えている。感想では、「協力する大切さ（16名）」、「クラスが一つになる喜び（7名）」、「団結の重要性（5名）」、「個人では味わえない達成感（4名）」などを今回学んだと答えていた。集団決定から実行に移せたことで、集団ならではのよさに気付くことができたことがうかがえる。項目Dについて、「みんなの役に立ちたい」と思っている生徒の割合についても大幅に増加している。お互いの意見を認め合いながら集団決定したことが集団のためになる自己決定につながり、実践意欲が高まっていることが分かった。項目Eについて、「十分達成できた」より「少し達成できた」と回答した割合が高かったのは、コンクールの結果が第2位であり、目標としていた優勝に届かなかったからという理由が多かった。しかし、「クラスが一つになり思い出に残る合唱コンクール」という目標の達成度については、多くの生徒が肯定的に記述していた。項目Fについては、半数以上の生徒が「十分達成できた」と答えている。感想では、「人任せにせず活動できた」「自分なりに頑張ることができた」など、目標を設定したことによって、自律的な行動ができた生徒が多くいたことが分かる。また、感想の中では、反省点や今後に向けての取組を書いている生徒も多く、目標を設定して実行することで、生徒に活動への問題意識が生まれ、改善に向けての新たな方策を考えるとところまで自己指導能力が高まっていることが分かる。

(ウ) 学級集団の変容

Q-U検査【図8】を用い、6月（実践前）から11月（実践後）にかけての学級集団の変容をみた。

【図8】Q-U検査からみる学級集団の変容



6月2日に実施した時には「なれあい型」を示していたが、11月4日に2度目を実施した際には、グラフが全体的に「学級満足群」を示す右上の方に寄ってきている傾向がみられる。このことから、学級での人間関係やルールが確立されてきていることが分かる。

エ 授業実践Ⅱの成果

- 自分の意見をしっかりともち、生徒がお互いに意見のよさを認め合うことで、話し合いに対する意欲が高まり、進んで発言できる生徒が増えた。
- 自分達で学級の問題点を見付け、解決策を話し合い、集団決定したことで、自分達で目標を達成しようとする実践意欲が高まった。

オ 授業実践Ⅱの課題

- 全体の話し合いで、積極的に発言する生徒の意見に流される傾向があったため、全員の意向を確認する場面を増やすなど、多くの意見を吸い上げる工夫が必要である。

(4) その他の実践

検証授業Ⅰ・Ⅱに加えて「開発的な教育相談」・「話し合い活動」に関する年間計画に基づき実践したグループアプローチの内容が【図9】である。4月には、ソーシャルスキルトレーニングとして、望ましい人間関係づくりに必要となる基本的なスキルのうち、「話の聞き方」「あたたかい言葉かけ」について取り組んだ。また、12月には、キャリアカウンセリングの手法を取り入れた授業を行った。生徒が「今、どんな自分か」「どう行動するとよいか」「将来したいことは何か」ということについて意見交換することで、自己理解や他者理解を促進しながら、自ら目標を決め、方法を考え、実行する意欲を高めることを目指した。

【図 9】グループアプローチの実践例

ソーシャルスキルトレーニング（4 月）	
	「上手な聴き方」 ①相手の顔を見る ②うなずき ③相づちを打つ ④最後まで聴く ⑤質問する
	友達に話を聴いてもらうのがこんなにうれしくて、会話するのが楽しい、うれしい、もっと話したい、と思えたのは初めてでした。
	自分が話しているとき、相手が相づちをうってくれたり、質問をしてくれたりすると、自分の話をきちんと聴いてくれているんだなぁと感じました。また、あたたかい言葉をかけたり、かけられたりすることで、友人関係もよくなったと思いました。
キャリアカウンセリング（12 月）	
	「自己理解」「他者理解」 ①今、どんな自分か？ ②どう行動するとよいか？ ③将来したいことは何か？
	私は、自分のした仕事が、人の役に立つということが全てです。やはり最優先するのは「自分が一番したいこと」だと思います。
	私は、楽しく働きたいです。自分の好きなことや、興味のあることに関係ある仕事につけると一番いいです。でも、生活していくためにお金は必要なので、「楽しさ」と「給料」のバランスを考えて、仕事につけるといいなと思いました。

IX 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- 自己肯定感に関するアンケート調査やQ－U検査により、生徒個人や学級集団の実態を生かした研究を行うことができた。
- 生徒指導の三機能を生かした話し合い活動により、生徒がお互いの意見を認め合いながら集団決定を行うことができ、自主的・実践的な活動への意欲が高まった。
- 構成的グループエンカウンターやお互いを認め合う相互評価などを行ったことで、自己存在感や共感的な人間関係が高められ、協力して活動することの大切さや、学級に貢献することへの喜びを感じる生徒が増えた。

2 今後の課題

- さらによりよい人間関係を育むためには、特別活動だけではなく、日常の教育活動全体を通して開発的な教育相談に取り組む必要がある。
- 今回は学校行事に関連した活動を基にして話し合い活動を行ったが、これを日常生活上の問題についても汎用することができるような手立てを工夫する必要がある。

参考・引用文献等

「中学校学習指導要領解説特別活動編」	（平成 20 年 9 月 文部科学省）
「生徒指導提要」	（平成 22 年 11 月 文部科学省）
「学級づくりのためのQ－U入門」	（平成 18 年 河村茂雄 図書文化社）
「学級集団づくりのゼロ段階」	（平成 24 年 河村茂雄 図書文化社）
「学級・学校文化を創る特別活動中学校編」	（国立教育政策研究所教育課程研究センター）
「生徒指導リーフ『特別活動と生徒指導』」	（国立教育政策研究所教育課程研究センター）
「学校心理学－教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス」	（平成 11 年 石隈利紀 誠信書房）
「構成的グループエンカウンター事典」	（平成 16 年 国分康孝・国分久子 図書文化社）
「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる」	（平成 11 年 国分康孝 図書文化社）
「生徒指導資料第 20 集」	（昭和 63 年 3 月 文部省）

《研究実践校》宮崎市立宮崎西中学校